



留学時代に住んでいたインターナショナルハウス(留学生用の寄宿舍)の友人たちと(左端が筆者、1983年)

つ、国際的な場で発表することの基礎が作られたということも、大きな成果ではないかと思っている。当時の授業での発表やディスカッションの経験により、今では何とか英語での発表をこなせるようになったと言っただけのようだろう。また、留学生とオーストラリア人が半々の寄宿舎に住んだ経験も役に立っているかもしれない。食事の際は、テーブルで一緒になった者同士で会話をすることが期待され、ここで国際的な感覚を身につけられたことも貴重な経験になった。

現在、毎年のように国際的なシンポジウムで発表する機会があり、専門分野以外の歴史学や農業関係のシンポジウムでも発表を依頼される機会があるが、これは、それができる日本人研究者がまだまだ少ないからであろう。

確かに英語での研究発表は楽ではない。単に発表するだけならば、原稿を作っておいて、それを読めばよい。ただし、発表を成果として活かそうとするならば、質問に対してまともに答えなければならぬし、相手からのコメントに対して議論することを期待される。質問しても意味がある答えは返ってこないだろうと、聴衆から思われるような発表では、単に発表したという事実が残るだけである。

### 👉「なる」から「なれ」へ

どうしたら英語で発表できるようになるのですか、と他人から訊かれることもある。しかし、私はいまだに発表できるように「なった」とは考えていない。発表できるとは十分思えないままに、発表「する」機会を重ねていった結果、現在では何とか発表できるようになったというのが実感である。おそらく英会話

の指導でも同じような言い方ができるだろう。ある日突然、話せるように「なる」わけではなく、話すという「する」機会を増やすように努力し続けることで、話せるように「なる」という説明である。私が学生に対して、英語で話せるように指導するときも、同じ言い方をしている。

と、このように書いてきたのだが、実はこの文章も自分を「追い込んで」英語の力を保つために書いている。自分はこの文章で書いているほど英語が話せるわけではない(と思っている)。意識して、英語で発表ができると思われようようにこの文章を書いている。できるようになるように、英語で話さなければいけない状況を作り出し、そのために努力して英語の力が落ちないようにしている、というのが実情である。そのように、やらなければならない状況を作り出し続けることで、何とかこれまで自分の力を保つてきたと言えるだろう。その基礎は、私の留学時代に身につけたのだということが最近になってようやくわかり、今になって改めて、その経験を与えてくれた石坂財団および日本万国博覧会記念機構に感謝している次第である。

# オーストラリアで学んだ 「国際感覚」

国際文化教育交流財団奨学生（一九八二年度。七九年東京大学教養学部教養学科卒業。八一年東京大学大学院社会学研究科修士課程修了。八二年よりオーストラリア、シドニー大学人類学部留学。八七年より亜細亜大学経済学部専任講師、九六年立教大学文学部助教授、同教授を経て、二〇〇六年より現職。



立教大学観光学部  
教授

豊田由貴夫  
とよだ ゆきお

一九八二年から国際文化教育交流財団

（石坂財団）の奨学金を得て、オーストラリアのシドニー大学に留学し、約一年半の期間を大学で学び、その後の一年半、パプアニューギニアに滞在して、フィールドワークを行った。

文化人類学を専門としてパプアニューギニアの研究をすると決めてから、オーストラリアがその準備のために適切な場であると考え、また調査を行う前に英語圏で文化人類学を学ぶことをもう一つの目標にして、シドニー大学への留学を決めた。当初、学位をとるつもりはなかったのだが、担当教授からせっかくの機会だから博士課程に入らないかとの勧めがあり、正規の学生として勉強することに

なった。

## ▼オーストラリアでの授業

博士課程の学生は授業を受ける必要はなかったのだが、この機会を利用して学部の講義をいくつか聴講し、ついでに大学院の少人数授業を受講し、オーストラリア人と一緒になってディスカッションを体験した。当時から既にオーストラリアにはアジア系の留学生が多く、日本人といえども全くオーストラリア人学生と同様に扱われたが、かえってそのほうが自分の勉強のためにはよかったようである。授業を受けるのは決して楽ではなく、聴講するだけの授業でも、終わるとぐったりと疲れた。なかでも受講生一人とい

●国際文化教育交流財団は、経団連第一代会長故石坂泰三氏の遺徳を記念し、一九七六年に設立された。これまでに、世界三一カ国の大学・大学院へ一六八名の日本人留学生を派遣するとともに、世界四〇カ国四七八名の外国人留学生への奨学金の供与や講演会等を実施してきている。

う授業を一年間続けたときは辛かった。マンツーマンの週一回二時間の授業を月曜に受けるのだが、週末にどんなに予習をしても十分に感じられず、月曜の朝に大学へ行くのは、毎回気が重かった。この時は日本の登校拒否児童の気持ちを実感としてよく理解できた。

シドニー大学では、英語圏で文化人類学が学べた点、調査のための準備ができた点では、予定の目的は果たせた。古本屋を回って集めた数百冊の本は、その後の研究にどれだけ役に立ったかわからない。また調査の準備として、パプアニューギニアの共通語であるビジン語を学ぶことができたのも、現地での活動がすぐに始められたという点で助かった。

## ▼国際的な場へ

このようにシドニー大学での滞在は私に研究上の貴重な恩恵をもたらしてくれたのだが、今から考えてみると、もう一